



フリーレクチャーになりたい

Masao DOI **土井正男** 北京航空航天大学 教授



フリーレクチャーとは

フリーレクチャーとはフリーライターとか、フリーアナウンサーのように組織に属さず個人の力で大学の講義を請け負って生きる人の意味である。芸人のように、電話一本でどこにでも出かけて、出前講義をする講師である。非常勤講師に近いが、決まった講義枠をこなすのではなく、こちらが用意した内容で講義をさせてもらうことで報酬を得る人のことである。そういう職業が存在するかどうかは知らないが、大学の定年を迎える年齢になったとき、そのような職業があってもいいなと思いはじめ、それを目指して生きてみたいと思うようになった。こう考えるようになったのは、いろいろ理由がある。

理由その1: 教科書の売り上げを伸ばしたい

第一の理由は、私の書いた教科書の売り上げを伸ばそうという、よこしまな理由である。私の専門は、ソフトマター物理という物理と化学の境界の領域である。この分野は、コロイド、高分子、液晶、界面など多様な物質を扱い、とかく各論になりがちである。そこで、物質ごとの各論的記述ではなく、物理的な原理を中心とした教科書が必要ではないかと考え、数年前から執筆を始めた。教科書の日本語版(1)は定年前に完成したが、英語版(2)が出版されるのは書き直しに手間取って、定年後になってしまった。せっかく教科書を作ったのに、それを使って講義ができないのは何とも口惜しい。ならばこちらから、講義をさせてくれ

るところに出かけて行くしかないと考え、フリーレクチャーという職業を思いついた。日本だけでは需要が少ないので、世界市場のなかで、自分の講義を売り出してみたいと思ったわけである。

理由その2: 若い人と一緒にいたい

第2の理由は、年齢によるものであると思うが、若い人を相手にする仕事がとても楽しく感じられるようになったことである。30代の若いころは、教育というものが苦痛であった。講義もうまくできないし、研究室の学生をどう指導すれば良いのかわからなかった。教育は自分の研究時間を割いて行うものであり、給料をもらう対価としての労働であると考えていた。それが、定年を迎える年齢になると、研究よりも、教育の方が楽しくなってきたのである。研究室に入ってくる学生が、自分の若い時と同じように、高慢さや野心と同時に不安や迷いを抱えて悩んでいるのを見ると、むしろにかわいいと思うようになってきたのである。彼らに声をかけ、彼らのもっている潜在的な能力や可能性をうまく引き出してやることは、自分が研究をして論文を書くことよりずっと大切なことのように思えてきたのである。このような変化は、生物学的なものではないかと思う。自分の脳が、知らず知らずのうちに限界を感じはじめ、求める方向を変えていったのではないかと思う。冬が近づくと、ブドウが枯れてゆくまえに一生懸命に甘い実をならせようとするように、生物が種を維持するようにと造物主が我々の体の中に埋め込んだメカニズムが働いているのであろう。

理由その3: 人材育成のお役に立ちたい

第3の理由は、大学の今の状況と関連している。大学の国際的競争力を伸ばすという目的で導入された様々な制度改革の結果、教員も学生も追い立てられるようにして生きてゆかなければならなくなってしまった。任期制が導入された結果、教員は、論文数と外部資金の獲得額における熾烈な競争を強いられるようになった。学生のほうは、奨学金のために専門的な研究に駆り出され、研究計画や報告書を書くことで忙しくなった。このような中で、政府の意図とは裏腹に、大学の人材育成の機能が弱っていると思う。教員の方からすれば、学生に短期間で成果を挙げさせようとする、与えたテーマを、与えた方法で実行させ、与えられた解釈で発表させるしかない。学生の方もそうすることで成果を挙げられるので、余計なことは考えなくなる。その結果、教育が促成栽培のようになり、学生の知的好奇心や批判精神を育てることができなくなっている。

大学の本来の機能は人を育てることである。しかし、昨今の大学では、その機能がだんだんと衰弱しているように思う。その原因は一つではないが、大まかに言えば、教育より研究という方向に流れて行っているせいだと思う。現役の先生には、これ以上の負担をかけるのは無理なので、フリーレクチャーの立場から手助けができないかと考えたわけである。講義のなかで、基礎の重要性、自分のあたまで考えることの重要性、世の中に役に立つことの重要性を学生に伝えた

と思う。競争の中で、勝ち組に残っているものの不安を抱えた学生や、そこから、落ちこぼれてしまっていると自覚している学生に対して、彼らが生きてゆくのに必要な言葉を与えたいと思う。

フリーレクチャーになるために

と、えらそうなことを書いたが、フリーレクチャーになるには、私には修行が必要である。なによりも講義がうまくなくてはならない。いくら高尚なことを言っても、学生にチンプンカンプンの講義をしても意味がない。学生の目線にあわせて、けれど基礎をしっかり教える講義にしたい。講義のスタイルも、学生に語るだけの一方通行の講義ではなくて、対話型の講義を試みたい。「ハーバード白熱教室」のように学生に問いかけて、学生と一緒に解答を考える講義もしてみたい。講義の合間に、冗談を入れて適当に笑いをとることも忘れてはならない…などなど、たくさんの課題がある。

という話を、私と同年代の人にしたら意外に賛同が得られた。その人たちを活用することは大学にとっても意味があることと思う。

- 1) 土井正男, ソフトマター物理学入門, 岩波書店, 2010.
- 2) Masao Doi, Soft Matter Physics, Oxford University Press, 2013.

© 2014 The Chemical Society of Japan

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員会が依頼した執筆者によるもので、文責は基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として掲載するものです。ご意見、ご感想を下記へお寄せ下さい。
論説委員会 E-mail: ronsetu@chemistry.or.jp